

KCELS

News letter No.22
MARCH 2007

第31回神戸女学院大学英文学会(KCELS)大会報告

英文学科長 吉田 純子

紅葉の鮮やかな岡田山、11月24日の午後、文学館28号教室にて、第31回目のKCELSの大会が開催されました。今回のKCELSは、英文学科の通訳・翻訳セクションが担当することになり、例年通りの研究発表と特別講演という二部のプログラム構成となりました。

周知のとおり、2002年度に始まった「通訳プログラム」は、2004年度より文部科学省の「現代的な教育ニーズ取組支援プログラム(現代GP)」に採択されて、全学向けのプログラムとなり、通訳トレーニングを通じて英語教育を実施しております。また、大学院文学研究科文学専攻において、2004年に開設された通訳・翻訳コースは、2006年3月に第一期卒業生を排出し、卒業生たちの今後の活躍が期待されています。神戸女学院でのこのような取組は、少子化時代の受験生の熱い注目を浴びております。この時期に、通訳関連の特別講演の講師をお迎えするのは、たいへん時宜に合ったことと思われまふ。

特別講演では、現在、明海大学外国語学部英米語学科教授、サイマル・インターナショナル顧問であられる小松達也先生を講師にお迎えしました。小松先生は、戦後日本の経済発展期に、国際会議、その他さまざまな政治・経済の国際交流の場において、草創期の同時通訳の第一人者としてお仕事を始められ、現在に至るまで、第一線で活躍してこられた同時通訳者の代名詞のような、伝説的な人物としてよく知られた方です。

ご講演は、「通訳のキャリア」と「通訳の技術」との二部から構成されており、前半は、小松先生が通訳者となられ、その後、日本での同時通訳が制度として確立されてゆく過程を経験者の視点からお話になりました。後半では、通訳の原理を

専門用語をまじえながらも、門外漢にもわかりやすくお話いただき、最終部では、通訳教育と英語教育との関連性、また、通訳教育受講者の英語力の問題にも触れられ、大学における英文学科の英語教育と関わりを見いだせるようなお話でした。ご講演後の約20分間、フロアーから、また司会者(松縄順子教授)から、核心をついたさまざまな質問が寄せられました。

研究発表の部では、本学大学院文学研究科英文学専攻の博士後期課程在籍の角谷由美子さんが“Evolution in the Image of ‘an infant’: Tennyson’s *In Memoriam* and Lawrence’s *The Rainbow*”という題でテニソンとローレンスの作品におけるダーウィン進化論の影響について発表され、また、本学非常勤講師の大西比佐代さんは、「江戸時代の通訳者教育論 — 雨森芳州の業績を中心に」という題で、対馬で収集されたフィールド資料の分析をとおして、雨森芳州の通訳者としての業績を紹介・発表されました。

伝統的な英文学研究、通訳実践・理論研究をふくめた発表・講演が盛りこまれた今回のKCELS大会は、神戸女学院英文学科の現在の立地点を象徴するような大会となりました。

通訳の技術

明海大学教授 小松 達也

I. 通訳の技術

通訳技術を一言でいえば、話し手のいうことを正しく理解し、その内容を分かりやすく聞き手に(他の言語で)伝えることである。これは通訳だけでなく、すべてのコミュニケーション活動に共通する原則である。

I-1 理解

通訳の技術は理解から始まる。通訳における理

解は、言葉ではなく意味(“sense”)を捉えることである。“Sense”はフランス語の“langue”に対応する概念として使った用語で(Seleskovitch 1968)、“intended meaning of the speaker”という定義がよく使われる。起点言語(SL)によるテキストから正しくセンスを捉えるには、言語情報(linguistic input)に加えて知識、分析力、推論といった「認知的要素」が大きな役割を果たす。

理解のために必要なもう一つの過程は、論理構造の把握である。話し手はある論理をもってストーリーを展開する。この話の筋を捉えることが、ディスコースの速やかな理解に必要であり、またSLの内容を対象言語(TL)で再表現する上でも不可欠である。次のいわば理解の最終段階はイメージ化による“mental representation”の構築である。これは再表現の基礎となる“internal program”というべきもので(Chernov 2004)、通訳者はこの自らの頭の中に作ったこのプログラムをもとに再表現する。いいかえるならば、通訳における再表現は通訳者が十分理解し「自分のもの」とした内容を、自分の言葉で表現することだ。

逐次通訳では理解のあとにリテンション(記憶とノート)という過程がある。このうち特にノート・テイキングは通訳者にとって大切なスキルだが、この過程は理解の延長とも考えることができる。ノート・テイキングでは十分理解し、記憶することが前提だからだ。したがってここでは、紙面の制限上これだけにとどめる。

I-2 表現(expression / production)

通訳における(再)表現は、「訳す」のではなく、I-1の過程を通して理解したことを、通訳者自身の言葉で、TLとして自然な形で表現することである。表現は自分自身の言葉で話すことによって、coherentで聞き手にとって分かりやすいものになる。通訳訓練の過程では、分かりやすく明瞭な話しかたを心がけるよう常に指導されるべきである。

Leveltによると、話すという過程は次のような部分から構成されている(Levelt 1989)。

Speaking = conceptualizing →
(controlled)
formulating → articulating → self-monitoring
(automatic in L1, controlled in L2)

“Conceptualizing”はL1による表現でもL2でも意識的である。何を話そうかを考え、それを表現できるようにまとめるには、かなりの意識的努

力が必要だ。この部分は通訳では理解の過程にあたると見ることができる。“Formulating”から“self-monitoring”に至る過程は、L1では無意識だが、L2では意識的である。われわれが第2言語である英語で話そうとするときには、その人の英語力のレベル(interlanguage)によるが、言いたいことを表現するのにかかなりの工夫と努力を要することは私たちがよく経験するとおりだ。

英語(L2)から日本語(L1)への通訳では、理解が十分であればその後にくる再表現は原則としてautomaticである。したがってL1への通訳ではSLテキストの理解が最大の課題になる。しかし日本語から英語への通訳においては、理解が十分であったとしても自然なTL(英語)で分かりやすく表現することは大きなチャレンジであろう。通訳者が英語表現のfluencyを獲得するために普段の努力を欠かせないのはこのためである。



I-3 逐次通訳と同時通訳

通訳の方式には逐次通訳と同時通訳がある。通訳の基礎はなんといっても逐次である。逐次には通訳技術の要素が基礎的なものから高度なものまでほとんど全て含まれている。同時は逐次の延長であり応用であるといつてよい。したがって通訳訓練は逐次から始まり、逐次通訳技術の習得に十分な時間が割かれるべきだ。

表現においても、「理解したことを自分の言葉で表現する」という点に変わりはない。同時でも通訳者はSLテキストの理解のために最大の努力をすべきである。「同時」という厳しい時間的制約と言語間の構造的(語順など)差異のために、不自然なTL表現になってもやむを得ないという、いわゆる「頭ごなし」方式の考え方は基本的に誤りである。理解のない表現がありえないことは、逐次でも同時通訳でも同じだ。

しかし同時通訳が逐次よりは高度でより難易度

の高い技術であることは間違いない。特にL2への同時通訳に習熟するには傑出した言語力とかなりの経験を要する。通訳訓練および英語学習への適用にあたっては、このことに十分留意すべきである。

江戸時代の通訳者教育論

—雨森芳洲の業績を中心に—

大西 比佐代

神戸女学院大学文学部非常勤講師

雨森芳洲(1668-1755)は、中国語と朝鮮語の会話能力に長け、対馬藩で60年以上藩の文教政策や日本と朝鮮との交隣関係維持に尽力した儒学者である。芳洲の業績のひとつに、日本で最初の通訳者養成の学校「韓語司」を開いたことがある。古来対馬藩ではその地理的条件から朝鮮半島との交易が盛んで、日本語と朝鮮語の両方を駆使して通訳者として働く人間が多かった。だがその実情を見ると、通訳できる内容は商用会話に限られており、文人国家朝鮮からの外交使節の会話を通訳できるレベルに達した者は稀であった。しかも通訳者の絶対数も景気に左右されて増減した。芳洲は、外交や文化交流の場に対応することも多いという対馬藩の特徴から、藩で働く通訳者には語学力だけでなく性格・知性・教養・道義心まで求められると考えた。そして、系統的通訳者養成の必要性を藩に建議し、その助力を得て1727年に「韓語司」を開校したのである。「韓語司」では最初の3年間に朝鮮語の運用能力確立に当てられた。カリキュラムの特徴としては、日朝両国とも漢字圏であることを活かした教科書を使用し、入門当初から朝鮮の文化を深く理解できるよう工夫されている点がまず挙げられる。さらにサイト・トランスレーションに通じる訳出方法の重視や、グループ・ディスカッションの導入など、現代的で実践的な外国語教育法が実践されている。「韓語司」に関する資料はまだあまり発見されていないが、1828年に対馬藩から薩摩藩に朝鮮語通訳養成の教師が派遣された資料が残っていることから、芳洲の没後もその運営は順調に行われていたようである。芳洲の著作を見ると、彼が儒学の教養に加え、日中韓三カ国の文化や風習・考え方を熟知し、優れたバ

ランス感覚と複眼思考を兼ね備えていたことがわかる。これは現代の通訳コースで学ぶ我々も見習うべき点といえよう。

発表要旨

Evolution in the Image of

“an Infant”: Tennyson’s *In Memoriam* and Lawrence’s *The Rainbow*

角谷 由美子

神戸女学院大学大学院博士後期課程

18世紀末から議論され続け、1859年チャールズ・ダーウィンによる『種の起源』により立証された「進化論」は文学にも大きな影響を与えた。本発表では、進化論が台頭して間もない時代を生きた19世紀詩人アルフレッド・テニスと、20世紀作家D. H. ロレンスが共に作中で用いた“an infant”「赤子」のイメージを分析することにより、両者の進化論に対する反応を考察することを目的とした。

はじめに、テニスとロレンスが表す「赤子」のイメージの違いに着目した。1850年にテニスが発表した挽歌『イン・メモリアム』における詩句“an infant crying in the night”「夜中泣き叫ぶ赤子」は純真で利他的な印象を与えるが、ロレンスが作中でこのテニスの詩句をそのままに引用し表した「赤子」は食欲で嫌悪する対象として描かれた。両者の描く「赤子」にはなぜギャップがあるのか。その答えを両者の進化論への反応の違いに導き出し、議論を進めた。

次に、彼らの進化論への反応の違いがいかに関「赤子」のイメージに影響を与えるか考察した。テニスの場合、進化論批判と進化への憧れが「赤子」を希望の象徴として捉え、その無垢さを強調させた。一方、ロレンスの描く野蛮で、本能的な他者との対話能力に欠如し泣き叫ぶ「赤子」には、彼の進化論に対する生物学的理解と、進化は廃退を伴うという「進化」への危惧が反映された。

最後に、以上の考察から時代による「進化」という概念の認識の差を明らかにした。19世紀半ば、進化論は人々に衝撃を与えると同時に自由にものを考え、それを正当化する道具と化した。しかし、20世紀に入ると人は科学的に「進化」と呼ば

れるものに支配され、現代人の意識は複雑化した。
『虹』においてロレンスがテニソンの詩句で表した「赤子」のイメージには、「進化」の概念における歴史の変遷の反映が認められると提示した。

キャンパスニュース

<退任>

- ・小林淑子特任教授 定年退職
- ・松縄順子教授 定年退職
- ・上 紀子教授 定年退職・名誉教授

<2007年4月より就任>

- ・田邊希久子准教授 (新任)

国際学会発表

* 東森勲氏

カナダ、トロント大学で開催された 33th Linguistic Association of Canada and United States (2006年7月31-8月4日) にて研究発表。

* 泉川泰博氏

福岡市で開催されたInternational Political Science Association 年次大会 (2006年7月9-13日) にて研究発表。

* 栗栖和孝氏

大阪大学で開催された4th Formal Approaches to Japanese Linguistics Conference (2006年8月17-19日) にて研究発表。
アメリカ、University of Illinois, Urbana-Champaignで開催された37th Meeting of the North East Linguistic Society (2006年10月13-15日) にて研究発表。

* Margaret Kim氏

韓国 Sookmyung Women's Universityで開催された Korea TESOL International Conference (2006年10月28-29日) にて研究発表。

* 長尾ひろみ氏

スイス、Winterthur、University of Zurich で開かれた International Federation of TranslatorsのCourt Interpreting 部門 (2006年11月2-3日) にて研究発表。

* 難波彩子氏

スペインで開催された 4th International Gender and Language Association (2006年11月7-9日) にて研究発表。

* 奥本京子氏

インド、ジャイプールで開催されたAsia Pacific Peace Research Association (APPRA/アジア太平洋平和研究学会) Conference (2006年1月5-7日) にて研究発表。
カナダ、バンクーバー、University of British Columbiaで開催された World Peace Forum 2006 (2006年6月25日) にて研究発表。
フィリピン、ミンダナオのBalay Mindanaw Peace Centerで開催された Asia Peacebuilders' Forum (2006年10月26-31日) にて研究発表。

* 立石浩一氏

アメリカ、California Institute of Technology で開催された “Redundancies of Verbal Instructions in Origami Diagrams” The 4th International Conference on Origami in Science, Mathematics, and Education (2006年9月8-10日) にて研究発表。

大学院生による学会発表

* 藤本梨沙氏

神戸女学院大学で開催された神戸女学院大学大学院文学研究科英語英米文学研究会 (2006年10月28日) にて研究発表。

* 是恒孝子氏

日本通訳学会関西支部第12回例会 (2006年7月15日) にて研究発表。

記念賞

2006年度、以下の英文学科学生に対して、次の学内の記念賞が授与されました。

佐々城きく(女32C36) 記念賞 E04053 岸野ジュリア
デフォレスト記念賞 E04022 濱場 瞳
丹部トモ(C41) 記念賞 GE0532 石野 尚

会員による出版紹介

- ◇橋本登代子氏 『ブロンテ家の人々』上下、
(ジュリエット・バーカー著、共訳、中岡 洋・
内田能嗣監訳、彩流社、2006年10月刊)
『言語文化と言語教育の精髓』(共著、吉村耕治
編、大阪教育図書、2006年11月刊)
- ◇東森勲氏 『ジーニアス英和辞典第4版』(共
著、大修館、2006年12月刊)
- ◇泉川泰博氏 “South Korea’s *Nordpolitik* and
the Efficacy of Asymmetric Positive
Sanctions,” *Korea Observer* Vol. 38 No. 1 (2006
年12月刊)
“Security Dependence and Asymmetric
Aggressive Bargaining: North Korea’s Policy
toward Superpowers,” *Asian Security* Vol. 3
No. 1 (2007年冬刊)
ロバート・ジャービス『複雑系の国際政治理論』
(共訳、ブレイン出版、2006年刊)
- ◇松縄 順子氏 「会議通訳」(ローデリック・
ジョーンズ著、松縄順子、ウインター良子共訳
松柏社、2006年4月刊)
- ◇奥本京子氏 『平和を拓く—安齋育郎教授退
職記念論集—』(安齋育郎教授退職記念論集編集
委員会、共著、かもがわ出版、2006年2月刊)
論文単著「第13章：対話のための『回路』とし
ての芸術のあり方を模索する—歴史教科書のオル
タナティブとしての朗読劇プロジェクト—」
(256頁-268頁)
- ◇山田由美子氏 *Transvestism and the Onnagata
Traditions in Shakespeare and Kabuki* (共著、
Global Oriental, UK、2006年刊)
- ◇吉田純子氏 *The Oxford Encyclopedia of
Children’s Literature*, (編集顧問・共著、Oxford
UP, 2006年刊)
『宇宙をかきみだせるのか—ポスト構造主義理
論で読む思春期文学』(仮題)(ロバート・S・ト
ライツ著、監訳・人文書院、2007年2月刊)

神戸女学院大学英文学会 会則

(1995年4月1日施行)

(2005年9月22日改訂)

- (1) 名称
本学会を神戸女学院大学英文学会と称する。
- (2) 目的
本学会は本学英文学科卒業生および大学院英文学専
攻修士の学術研究の継続と発展を奨励し、それら
研究活動の発表と交流をはかり、あわせて在学生の
向学研究意欲を推進することを目的とする。
- (3) 構成
本学英文学科卒業生、大学院英文学専攻修士有志
および本学英文学科教員、元英文学科教員を正会員
とする。在学生を準会員とする。
- (4) 活動
年一回、英文学会を開催する。
Newsletterを発行し、会員の活動、英文学科の現況、
本学英文学会その他の活動の内容を報告する。
その他。
- (5) (a)上記の活動運営のために運営委員会をおく。
(b)運営委員会は、学科長、学科会計委員と、若干名
で構成されるものとする。

内規

- I. 大会での発表について
 - (1) 発表希望者は毎年7月1日までに、発表論文の
簡単なレジュメと略歴を添えて、英文学科事
務室まで申し込み、KCELS委員会が審査
の上、決定する。
- II. 維持費・参加費について
 - (1) 在学生を除き学会参加者は参加費500円を学会
当日に納入する。
 - (2) 英文学科教員は年に500円を維持費として納入
する。
 - (3) 維持費・参加費の徴収、及び郵送費などの経
費の支出は、学科の会計委員が担当する。
 - (4) (3)に関しては、KCELS専用の口座を利用
する。



編集後記

地球温暖化のせいか、暖かい気候が続いています。地球はどうなってゆくのでしょうか。

今回のKCELS大会には、初めて通訳関係の講演者をお呼びすることができました。通訳・翻訳がアカデミックな研究分野として開かれてきたことを痛感しました。皆様のさらなる研究の発展をお祈りします。(N)

KCELS Newsletter編集委員

(2006年度運営委員)

○松縄順子 ○長尾ひろみ ○Cyndee Seton ○吉田純子
(ABC順)

KCELS Newsletter No. 22

編集発行 神戸女学院大学英文学会

〒662-8505 西宮市岡田山4-1

Tel (0798) 51-8548 Fax (0798) 51-8532

<http://www.kobe-c.ac.jp/english/kcels.html>

2007年3月発行